

子どもにとっての良い環境とは何かを考える

研修会実施報告

本財団では 2002, 03 年度に保育に携わる方々に向けた「子育てアドバイザー研修講座」を開講しました。その講座修了認定者を主対象に、2004 年 9 月 18 日午後、東京都新宿区の家光会館会議室において、シンポジウム形式のフォローアップ研修会を実施いたしました。本シンポジウムの企画、司会をご担当頂いた早稲田大学根ヶ山先生と各講師の先生方に、講座内容の骨子をご報告頂きました。当日の講義記録などを元に作成して頂きましたので、書式等は統一しておりませんのでご了解ください。

(編集部)

・本研修会の趣旨

早稲田大学人間科学学術院 根ヶ山光一

子どもは胎内にいれば胎内の、また生まれ出てくれば外界の、それぞれ環境の影響を受けて育つ。いわば環境は子どもの発達を規定する。

その環境のある側面は、長い時間のなかで、子どもの発達がそれに沿うような形で進行するように進化してきた。例えば同じ哺乳類でも樹上生活者・地上生活者・地中生活者・海洋生活者はそれぞれ、その生息環境にあった発達の過程を備えている。ヒトの子どもは、樹上に適応した哺乳類としての霊長類が地上化したという、その進化的な背景を担った行動発達を遂げる。クジラの子はクジラの子として水環境に適応し、モグラの子はモグラの子として土中環境に適応して発達していく。

これは、進化の中で生物が築きあげてきた環境と行動発達の切っても切れない関係であるが、人間の場合にはそれ以外に、自らが作り出した人工的な環境とつき合っていくという新たな課題が存在している。この課題は、その背景に進化的な保障がないかもしくは乏しいため、環境にうまく対処する術を生活体が身に付けておらず、それが子どもの場合しばしばその適応に困難が生じることがある。また子ども達は、進化の産物として、好奇心・探索など環境への志向性を生まれつき強く保有している存在である。環境とのつき合い方に「能動性」を生得的に備えていることは、彼らの世界を広げることに役立っている。

フレーベルの「恩物」の例に典型的に見られるように、大人は、子どものためによかれと考えて、子どもの生活する環境に手を加え、あるモノは子どもに与えたり、またあるモノは逆に子どもから隠したりする。それが私たちの養育・保育・教育の重要な要素となっている。大人が作るという側面の中には、個々の大人がその個人の価値的判断で日常的に構成する部分と、その社会が自明のこととして恒常的に用意している部分とがある。その二つを明確に区別することは困難であるが、おおざっぱに言えば後者は文化の伝達といったことと関連が深いであろう。

一方前者は、そのような社会的価値の体系を踏まえつつ、大人がそれぞれ個人あるいはローカルな所属集団の価値規範をもとに、個別的にさまざまなモノを子どもに提供したり、逆に隠したりして、

子どもの発達を意図的・無意図的に操作する。

このような大人側からの環境への人工的な改変は、子どもの心理行動発達をいわゆる「望ましい」方向に牽引するペースメーカーの役割を果たす。発達心理学ではそれについて、「足場づくり」とか「発達の最近接領域」といった用語によってその重要性を指摘しているし、またそれに対して「遊び」を通じて能動的に関わりかけるといった子どもの特性についても研究を重ねてきている。

保育園や幼稚園・学校という現場は、このようなことが集約的に現れうる舞台である。保育あるいは教育とは、社会が「制度」としてある基準を定め、一定のルールのもとに子どもの育つ環境を統制する営みである。それはもちろん理論知や実践知をよりどころに、体制が子どものためによかれと知恵を絞り資源を投入して構成するシステムであり、子どもにとって好ましい環境となっている「はず」もしくは「べき」である。

しかしながら、大人が人工的に環境を操作することが、その意図に反して、かえって子どもと環境との間に深刻な不整合を生じ、子どもを生命の危険に陥れるような可能性すらないわけではない。その環境作りのよってたつ基盤がもし子どもの特性に照らして妥当性を欠くようなものであったり、あるいは実際に日常の中で選択される個々の営みが子どもの心理行動傾向と符合しないようなものであったりすれば、その環境はたちまち子どもを苦しめ、その発達を阻害するものとなりかねない。

したがって、子どもの発達と環境の「いい」関係を考えようとするれば、子どもが本来もっている環境への志向性や能動性、あるいは環境への反発性といったことについて正しく知り、それをもとにした子育ての環境作りを行う必要がある。子どもが環境に対してみせる能動性は、必ずしも常に大人が予測し期待し歓迎するような好ましいものばかりではなく、ときに不潔で不快で危険なこともあるであろう。子どもの育ちを大人が支えるには、親を含めた大人がどのような環境を用意してやり、またそこで子どもが見せるたくましい能動性やある種のいかわしさを、大人としてどう受け止め、尊重し、また規制すればよいのか。そういったことを実際に現場の実践と関わる立場で考察してこられている研究者の問題意識と知見をふまえ、現場の保育士さん達といっしょになって考えようという意図で、このシンポジウムが企画された。

そのアプローチとしてはいくつかの可能性があるが、シンポジウムで目指したのは、現実の保育の中で展開されている実践のなかで、実際に子どもがそれらに対して何を求め、どのように反応しているかを具体的に見つめることである。上記の「自然」「人工」という二分法は、保育の現場では、「子ども」と「モノ」、「子ども」と「おとな」の関係として現れる。もちろんモノがモノだけで子どもの周りに存在するはずはなく、ヒトとモノのシステムとして存在すると考えれば、この二つは一つのものとなる。

今回の企画としては特に、保育の状況に大人が子どものためと考えてあえて導入するさまざまな「モノ」(生き物を含め)に対し、子どもがどう対応しているかを具体的な事例をもとに示し、それを通じて背後にある「モノ-ヒト」システムのもつ意味が浮かび上がることを目指した。

モノとひとくちに言ってもさまざまなものが候補に挙がるが、具体的なトピックとして今回は「遊具・オモチャ」(埼玉県立大学短期大学部保育学科教授清水玲子氏)、「テレビ・ビデオ」(東横学園女子短期大学保育学科助教授土谷みち子氏)、「飼育動物」(日本獣医畜産大学獣医学部教授柿沼美紀氏)

を選定した。

いずれも、保育の現場で、保育士が子どもの発達上有意義だと考えたり、あるいは保育の実践上有効であると考えたりして現場に意図的に導入し、子どもが日常的にそれに曝され、あるいは触れるものである。そういう導入者の意図と、それと出会う子ども達の能動性がどう調和し、あるいは齟齬するかという姿を通して、保育の現場に大人がそういったモノを導入することの意味について見つめ直すきっかけにしたい、というのがこのシンポジウムのねらいである。

・保育における遊具を見る視点を考える

埼玉県立大学短期大学部保育学科 清水玲子

保育の世界では、遊びは成長、教育の一環として大事な物だという考え方がありますが、分かりやすい教育効果を狙って遊びを考える傾向がないとはいえません。しかし、子供が大人の意図通りに喜んで遊ぶとは限りません。ここでは 遊びと成長、教育との関係について実例をもとに吟味してみたいと思います。

1. 大人の意図と子どもの姿がちがったとき

(1)ロッカーに登ってあそぶ

どこの保育園でも、子どもたちの着替えやカバンを入れるための、低めのロッカーがありますが、3歳ぐらいの幼児は、これにすぐ登りたがります。あの高さだと中の棚に足をかけて上に登ることができる。子どもたちは一生懸命がんばって上に登ってあそぼうとします。

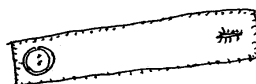
大人としては危険性などを考え、あまり登ってほしくない。いくら注意しても登るので、そのロッカーの上に花などを飾って登れないようにする。登るのは他の遊具でできるからいいだろう・・・。

ところが子どもはその花をきれいに片づけて、ロッカーの上であそぶ。あるいは他に登ってあそぶ物を用意しても、その遊具であそぶのと平行してロッカーの上であそび続けます。

(2)ボタンかけやホックを止めること楽しく「教育」しようと苦労して作った手作りおもちゃで子どもたちはどう遊んだか。

図に示したボタンかけを、苦労してたくさん作っておられる方々もいます。私も作ったことがありますが、意外と手間がかかります。これは幾つもつないで長いヒモにすることもできるし、あるいはリングにして繋げていくなどいろいろな遊びの中で、子どもたちがボタンかけやホック止めを身につけていけるようにとの意図があります。

ある保育園で2歳児保育を見学したときのことで、こどもがこれをフライパンに入れて、焼きそば作りで遊んでいるのです。どうもこのボタンがおもちゃのフライパンにぶつかって出す音が楽しいようです。なかなか大人の意図通りには遊んでくれません。



(3)保育室の空間の作り方・・・落ち着いて遊べるように考えたしきりが、かえって落ち着かなかったりする。

ある園で、広い場所では落ち着かないだろうと、子どもたちが静かに絵本を読んだりできるようにと背の高さの囲い、部屋のしきりをしました。ところが子どもたちはそのしきりの向こう側が気になってしょうがない。お互いに背伸びをしてしきりの両側からのぞき込む。本来は子どもたちを落ち着かせるだろうとの空間作りが、かえって落ち着かなくさせている。

このように大人の意図と子どもの受け取り方がずれているということはないでしょうか。

2. 大人の意図にそって遊んではいるけれど

(1)ごっこ遊びの小道具

意図的な遊具や遊びのルールについて言えば、子どもがそのルールに沿って大人の決めた範囲内で遊んでいると大人の側はそれでよしとしてしまうきらいもありますが、遊具にもいろいろな形があるのではと思います。たとえばごっこ遊びのごちそうはどんなにすばらしいごちそうでも、ごちそう以外のものにはならないわけです。一方、積み木は子どもたちの想像力に応じて様々なものに形を変えていくという性質があります。

(2)木登りのルール

大人の考えから言えば木登りは危ない。しかし、遊ばせてさせてやりたいという遊びです。子どもたちに園内の木登りは認めているものの、この木はここまで登ってもいいが、何段目から上はだめと、かなり細かな木登りルールを決めている保育園があります。木登りを許しているだけでもいいといえますが。

危ないからと言って、大人が木登りの範囲を規定してしまう。確かにこのことで危険性は防げますが、木登りって本当はこんなものではない。木登りの醍醐味は、ここから先は折れるかもしれない、揺れてこわいとか、落ちるかもしれないという体験と向き合うことによって成長してゆくのです。ところが危険を防ぐということで子どもの経験を事前に止めてしまう。ちょっとは傷をしても、ここで子どもたちが何かをつかんでゆく助けとなる。このような自然との対話の可能性を事前につんでしまっていいものなのでしょうか。

3. 遊具とは何かを考える視点

子どもの遊ぶ姿から学ぶ・・・何がおもしろいのかを徹底して知ろうとする姿勢がなにより大事かと思えます。

また、それぞれの遊具の性質について吟味してみることも必要です。たとえば積み木とブロックの違いを見てください。

積み木は斜めに積み重ねていけば必ず崩れてしまいます。いうなれば子どもたちはここで宇宙の法則に直面しているともいえましょう。ところがブロックは多少斜めに差したところで崩れることはない。全く別な性質があるわけです。

どちらが遊具として優れているかということではありません。いろいろな遊具を子どもの立場に立

って一緒になって遊びながら吟味していくことが大切だと思います。

もちろん安全面に十分の配慮をすることも必要です。しかし、今この場だけが安全であればいいという考えでは、遊びそのものが魅力のないつまらないものになってしまうということにもご留意頂きたいと存じます。

(文責：編集部)

・乳幼児とメディア環境

東横学園女子短期大学 土谷みち子

1. 子どもの成長とメディアの関係について：これまでの議論

2004 年は、子どもとメディアにとって画期的な年になりました。日本小児科医会、日本小児科学会が、数ヶ月の違いで「2歳以下の子どもにテレビ視聴は控えて」という乳児期からのメディア接触について制限する提言をだしたからです。主に臨床現場から、言語発達や情緒の表出に心配を感じる子ども達のなかに、乳幼児初期から過剰にテレビ・ビデオに接触していたという共通の生活が見られたと心配を発したことが契機になっています。しかし、子どもの成長とメディアとの関係についての研究は、日本では十分な蓄積がなく、特に乳幼児期の成長に与える研究については、研究がはじまったばかりです。根拠のある研究結果は充分ではないけれども、現実には、乳児期から過剰に接触している実態があるので、幼い子どもやその家庭と関わる保育施設では、この問題に関心を示して、丁寧に生活や保育を営む必要性があると思います。私は、乳幼児と特にビデオ接触について1998年に論文を発表し、この問題について警鐘を鳴らした立場にありますので、きょうは、乳幼児とメディア接触の実態をお話して、皆様方に今後の保育活動について留意していただきたいことをお話させていただきます。

2. 乳幼児とメディア接触の実態

1999年に乳幼児をもつ母親180人に一人ひとり面接して集めたデータですが(図1)、テレビ画面をいつから視聴しているか伺ったところ、48%の子どもが1歳になる前から視聴していて、そのうち生後5か月以前のお座りもできない乳児が20%もいました。その後2000年以降にもNHKなどが調査していますが、乳児期に視聴開始した子どもは67%になっています。特にビデオ機器が普及したこと、親がテレビ嗜好性の高い世代になっていることが影響していると思われます。現在の中高生と比較もしましたが、現在の子どもの乳児期はかなり早期からメディア接触している実態があります。また保育園に通う子どもで調査したところ、テレビ・ビデオ接触時間は年齢があがるにつれて、徐々に増えている実態も明らかになりました(図2)。10年前の子どもより、大人が先行してメディアに接触させていること、外遊びなどの直接体験は減って、視聴覚優先の間接体験が増えている実態があります。

しかし一方的に、親世代の教育力が低下していると責めることでは、この問題は解決しません。現代の子どもが育つ、親が子育てする、子育て・子育て環境は、とても厳しいものがあります。安全な遊び場がなく、安心して親子がつきあえる地域の人々も減少し、子どもが巻き込まれる事件の多さも親を不安にさせています。面接してみると、何より、子どもの接触体験が乏しく、教育歴の長い親世

代が、言語の発達が未熟な幼い子どもと付き合うことを難しく感じていることがわかりました。親同士の人間関係の難しさも、子育てをますます室内化させていました。乳児期からの過剰なメディア体験は、現代の子育て環境の改善を考える問題だと思います(図3)。

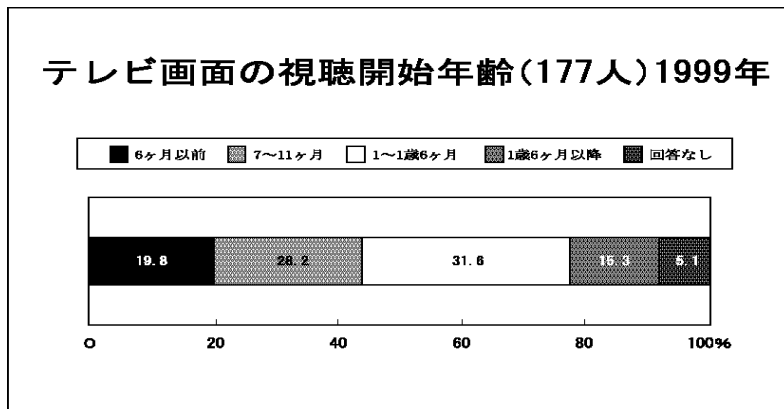


図 1

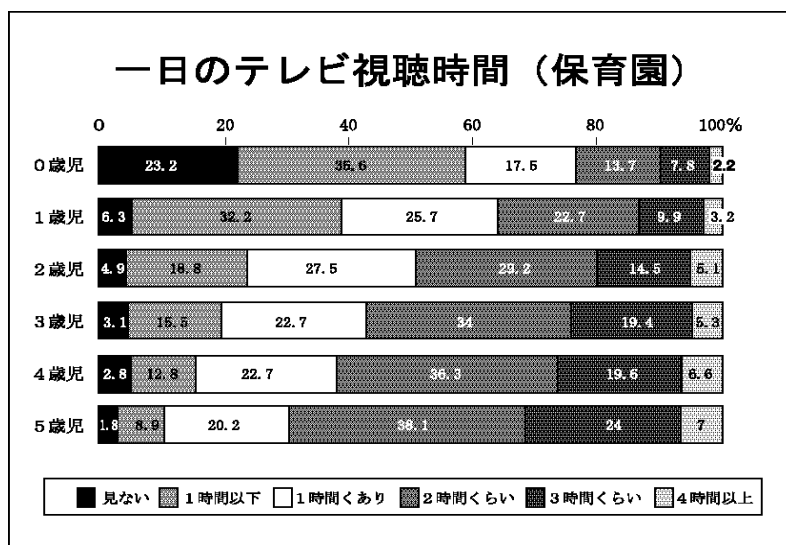


図 2

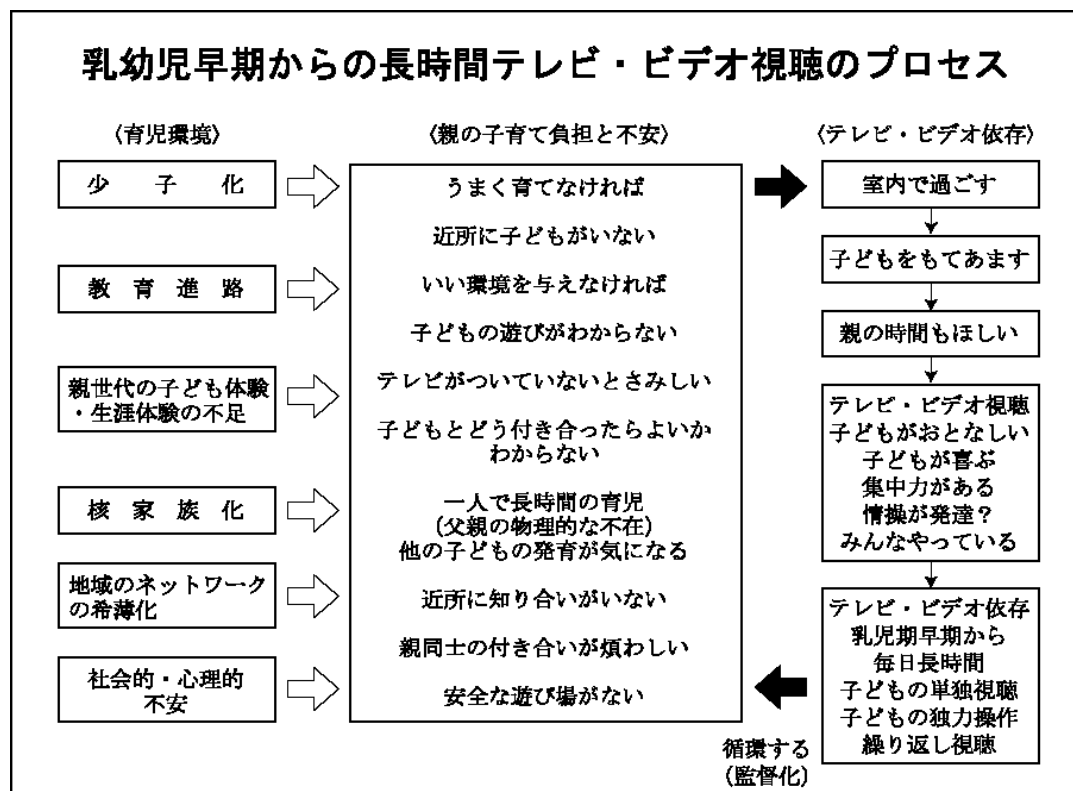


図 3

3. 乳児期からの成長に大切な生活とは？

乳幼児期は人間としての成長の根っこといわれる大切な時期です。映像が中心の間接体験よりも自分から体を動かして遊ぶ直接体験が多いこと、そして直接体験を先に経験して成長しておくことが大切な時期です。この人間社会に存在する物や人や自然をよく知ることが心や体を成長させます。とりわけ、乳幼児が人間との豊かなやり取りをしないで、テレビ画面の前に一人で長時間座ることは、体やコミュニケーションの成長に弊害を及ぼします。メディアは、大人と成長期の子どもでは、その影響が異なることを知ってほしいと思います。

図 4 は、3 歳児が直接体験である外遊びと間接体験であるビデオ視聴の時間を、日常どのようにバランスをとっていたかを示したものです。毎日 3 時間以上ビデオ視聴する習慣があると答えた家庭の子どもでも、外遊びの時間も 3 時間以上とバランスをとっていた子どもたちには、保育者が感じる成長の心配は見られませんでした。しかし、外遊びの習慣が 1 時間以下であると答えた三角で示したグループの子どもには、集団で心配な行動が多く見られました。幼い子どもたちのメディア接触については、単に視聴時間を問題にするのではなく、体を動かす生活や大人との情緒的なコミュニケーションをする生活を大切に、バランスのとれた日常を考える必要があると思います。

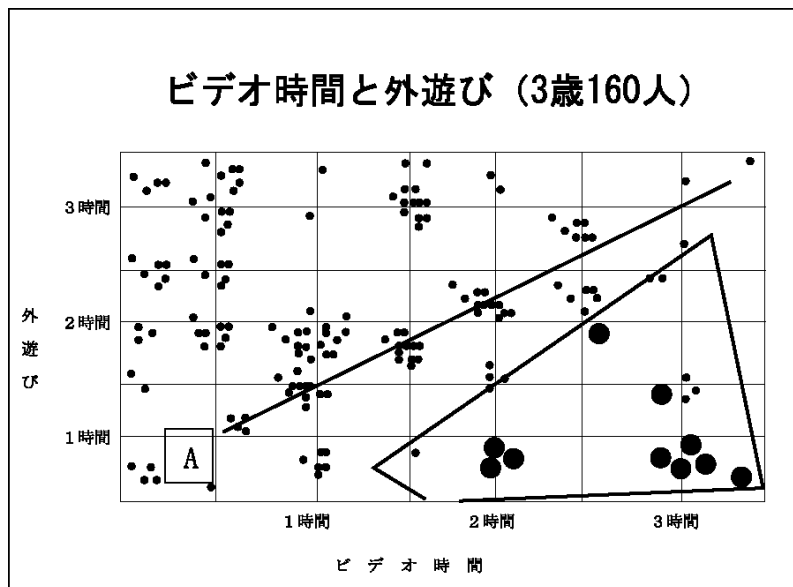


図 4

4. これからの保育に期待すること

私はこれまで、乳児期から過度にテレビやビデオを視聴し幼児期初期に心配な様子が見られた子どもには一緒に遊びながら行動に働きかけ、家族には面接をお願いしながら成長と一緒に見守ってきました。多くの事例から教えてもらったことから、乳幼児期には、次のようなテレビやビデオとの付き合い方をすすめています。もう1歳過ぎているお子さんは、 からと話してください。

テレビ画面は1歳過ぎてから 見るときはできるだけ大人と一緒に 1回に30分以下(一日2時間は多い) 見たら消す習慣を 巻き戻して見ない 見た時間以上の外遊びか散歩を 起きるとき寝るときにはつけない(テレビやビデオでつらない)

これには、やはり科学的な根拠はありません。事例からの私の学びです。いつか研究に裏打ちされたメディアとの付き合い方が発信されるよう、学際的な研究が進むことを願ってやみません。

そして情報化社会といわれる現代において、このメディア環境が子どもの成長に与える影響を軽視せずに、特に子どもの成長を家族と一緒に担う保育施設では、成長を支える生活体験を保育活動の中に意識的に組み込んでいく必要を感じます。私は、乳幼児の心とからだの成長を支えるために、1) 五感を駆使した直接体験(自己認識をはぐくむ) 2) 親と子どもの関係をはぐくむ保育(情緒的な交流から愛着関係の調整) 3) 子ども同士の接触を促す遊び(他者との共感性をはぐくむ) 4) 親と子どもの生命力を引き出す遊びや活動(育ちの主体性を感じる)などの活動を保育施設から発信して、それが家庭生活にも移行して、地域に子どもが育つ日常性が回復することを願っています。皆様とともに、子どもが豊かに育つ社会をつくっていきたいと思います。

・ 保育現場における動物飼育の役割と飼育実態

- ウサギとカメとムシの関係 -

日本獣医畜産大学 柿沼美紀

一般的に動物飼育は子どもの情操教育に良いと言われ、日本では保育の現場で小鳥やウサギなどが飼育されてきた。近年鳥類の飼育率はさがっているものの、ウサギ、モルモット、カメ、金魚などの飼育を保育の一環として行っている所は少なくない。現場では動物飼育全般の効用は認識されているようだが、系統だった研究はまだ限られている。

過去 10 年以上にわたり動物飼育率 9 割前後を維持している江戸川区立保育所における、飼育動物種と動物に対する子どもの反応を調査した。これまでの飼育動物種の変化を見ると、カメ、ザリガニ、キンギョが安定して飼育されていることが判明した。一方、子どもの分離不安軽減や学習に効果があると報告されているウサギの飼育率は減少している。過去の調査の記述項目では、ウサギに関する内容が多く、その効果もはっきりしていた。しかし、実際の接近行動関連の項目や、飼育率を見ると、カメやムシの重要性が見えてきた。

ムシは動物への多角的な興味や関心を広げる入り口となっているようだ。飼育しているムシに異変があると、保育者に報告する、似たようなムシに興味広がる、図鑑などで調べるなどの行動が見られた。特に 3 歳児の場合、ムシに対する反応がはっきりしているようだ。一方でウサギは、ムシにはない接近行動や言語的関わりを引き出す要素があるようだ。例えば挨拶をする、世話を焼きながら話しかけるなどである。また、朝、保護者と分かれた直後や、保育時間に一人でウサギ小屋に行って話しかける、じっと見るなどして、気分転換を図ることも報告されている。

江戸川区では、獣医師会のボランティア診察、保育者向け講習会などを通して動物飼育を支援している。ウサギの避妊手術も受けられ、飼育指導も充実している中、その飼育率及び飼育数は減少傾向にある。教育効果が高いと報告されているにも関わらず飼育率が減少しているのはなぜだろうか。この矛盾の中には大人の思いこみが関与しているのかもしれない。

幼い子どもにとっては、変化が分かりやすい、扱いが容易であるムシはウサギよりも親しみやすい可能性がある。そしてムシの教育的効果もそれなりに効果があると考えることができる。大人にとってはムシよりもウサギの方が一般的にアピール度は高いが、同じことは幼児にはあてはまらないのかもしれない。そして保育現場における飼育実態は子どもの興味を的確にとらえた結果とは考えられないだろうか？

